

## 総括

多田一臣

「総合討議」では、基調講演および以下の三つのワークショップで提起された問題点の整理をブッシー氏が行い、それをもとにそれぞれの報告者、コメンテーターの方々から補足意見を頂戴した。発表内容が、地域的には日本・インド・南米・ヨーロッパ、時間的には古代から現在にまで及び、多様な議論が展開されたため、「総合討論」においては、まとまりのある結論を導くにはいたらなかった。ただし、広い意味での生者と死者との交流のありかたを考えることが、議論の中心であったかと思う。

以下、三つのワークショップを振り返ることで、そこでの議論の概要をまとめてみたい。なお、基調講演で提起された問題については、必要に応じて紹介することにした。

### 1. 進んで死を迎える

ここでは、どのようにしたらよりよい死が迎えられるのかという問題が議論された。杉木恒彦氏、カラン氏は、どちらもインドの事例をもとに上記の問題を論じた。かつての日本にも、あの世からのお迎えを安らかに待つという伝統的姿勢があり、その手助けをするのが寺院の役割だった。いずれにせよ、ここでは死に向かうものの態度がまず問われることになる。一方、この問題は、人が死を、あるいは死後の世界をどのようなものとしてイメージしたのかということともかかわる。小峯和明氏は絵巻を素材として、中世日本におけるその具体例を紹介した。このワークショップで展開された議論は、ヴェレレン氏の基調講演の内容、すなわち中国道教の思想の中で、死者の存在がどのようなものとして見られていたのか、という問題ともつながっている。死者の世界をいかに位置づけるかという、宇宙観の問題である。さらに、より深刻な課題として、自発死をどう見るかという問題もある。基調講演で、アルペール氏が提起した問題だが、殉教的な死、戦争における英雄的な死を

どう見るのか、それは自殺とはどう違うのかという、きわめて困難な問い掛けである。個人的であれ、共同体的であれ、それによって価値づけられる死が自発死の根本にある、ということがそこから見えてくる。ただし、愛国的な死についていえば、個人の意志という以上に、むしろ国家の本質の中に、愛国の大儀に殉ずるように強制する一面が抱え込まれているのではないか、という疑問が提出されたことも忘れてはならないだろう。ガイアナにおけるカルト集団の集団自決事件（人民寺院事件）のような自殺は、個人の殉教とどのように違うのか、という問い掛けも、会場からの質問としてあった。討議の中では、とくにヴェレレン氏の基調講演に対して、死者の世界が必ず何らかの具体性をもって想像されるところに、この世の現実、すなわち生者の世界とのつながりが立ち現れているのでないか、との指摘もあった。他界がしばしば現実世界のパロディとして形象されることがあるのも、この問題とかわかっていよう。

## 2. 非業の死を受け止める

このワークショップでは、死者の崇りをどのように受け止めるのが議論された。それは、個人や家の問題であることもあり、また共同体の問題であることもあるが、とくに注目されるのは祖霊の崇りの問題である。基調講演において、ヴェレレン氏がその問題について論じ、これを受けて、池澤優氏が中国の事例、ロバン氏が南米ペルーの事例に拠りつつ、それぞれの議論を展開させた。非業の死者が、鎮魂の儀礼を通じて生者に幸いをもたらす存在となる、いわばよき死者へと転換されるプロセスこそが重要であり、そこに生者と死者との交流をはかるしくみが必要とされることが明らかにされた。ヴェレレン氏、池澤氏が取り上げた中国の事例についていえば、「天」の観念、また儒教的な「孝」の倫理が介在するという特異性があることが指摘された。この点は、日本の事例との比較を進める際に注意を要するところだろう。一方、波平恵美子氏は、近年の社会構造の変化にともない、そうした鎮魂の儀礼が次第に変質しつつあることを、最近の重大事故によって生じた大量の死者の慰霊の問題を通じて具体的に考察したが、その検討もまた今後の大きな課題となろう。近時、日本において、個人墓への志向が現われ始めていることも、こうした状況とどこかで通底する事象であるに違いない。

### 3. 死者とともに生きる

池上良正氏は、死者の存在を身近に感じる日本の民俗文化のありかたを紹介し、そこに哲学的・観念的な思考を超越した民間信仰の根づよい伝統があることをあきらかにした。一方、フィーン氏は、キリスト教会における洗礼観、その代父母と代子との霊的關係について論じ、またヴァサス氏は、悪魔払いの対象である、ユダヤ教の憑依霊ディブークについて取り上げた。代父母と代子の関係など、日本の親方・子方制とも重なる面をもつが、その関係は死後の霊的世界にまでは及ばないから、彼我の違いは相当に大きいといえる。討議の中でも指摘があったように、死の問題は、それををつきつめると、伝統的な文化のありようが見えてしまうということかもしれない。ならば、比較文化論的な考察は、今後ますます重要になろう。ヴァサス氏の取り上げた憑依霊ディブークの存在が、現代演劇の創造にも生かされているという指摘も、実に興味深いものといえる。

以上、三つのワークショップではさまざまな問題が取り上げられたが、冒頭にも触れたように、生者にとって死者の存在とはどのようなものであるのか、生者と死者の交流はいかにしてなされるのか、というところに帰すると思う。「死とその向こう側」と題しながら、「向こう側」とは何かという議論が少なかったという指摘もあったが、これは「向こう側」の像が作りにくくなっている状況の反映であるのかもしれない。ともあれ、世界的な視野で活発な意見交換ができたことを喜びたい。

最後に長い長い蛇足として、今回の討議を通じて得た個人的な感想を述べることをお許しいただきたい。

上にも記したように、アルベール氏は、基調講演において、殉教的な死、あるいは戦争における英雄的な死について言及したが、これに対して、コメンテーターの古橋信孝氏から、「近年、日本の若い人々の間で、過去の戦死者の死を国家の大義のためでなく、家族のため、愛する人のためと捉えるような見方が現れ始めている。そうした意義づけは、これまでにはなかったものだ」とする指摘があった。なるほど、家族というのは、国家とは違って私的な度合いが著しくつよい。しかも、国家とは直接のつながりをもたない。ならば、戦死者の死は、「国家の大義」とはまったくかかわらないことになる。こうした見方が現れるようになったのは、果たして日本だけのことなの

だろうか。

おそらく、若者たちにとって、社会の存在そのものもはや実感の対象ではなくなってしまったところに、上のような見方が現れる根本的な理由があるのだろう。「国家の大義」という発想そのものが、もはやリアリティをもちえなくなってしまっているのである。

だが、現在の事態はさらに深刻であるともいえる。社会の枠組みの不確かさは、それを支える理念の崩壊を意味するから、個のありかたにも大きな影響を及ぼす。個の存在を意味づけていた社会的根拠に絶対的な価値のないことが露呈してしまうからである。その結果、社会性をまったく欠いた、いわば自己を中心とした世界しか知覚できない若者たちが、いつのまにか増大することになった。数年前、正高信男『ケータイを持ったサル』（中公新書）が刊行されて大きな話題を呼んだ。「人間らしさ」の崩壊」という副題に示されているように、「人間らしさ」=社会的な関係を構築できなくなった若者たちのありかたを、人間としての退化すなわちサル化の現象として把握したユニークな文明論である。過去の戦死者を「家族のため、愛する人のため」と捉えるような心性は、むしろこうしたサル化の現象とどこかで通底しているのではあるまいか。

それというのも、近年の社会現象の一つとして、若者たちの「無意味」な自殺の増加を指摘しうるからである。『死生学研究』2003年秋号に、この国際会議のコメンテーターの一人である末木文美士氏の「自殺考」という論文が載っている。「南条あやのために」という副題にも示されているように、南条あやというリストカットを常習する少女の自殺にいたるまでの軌跡を追った論だが、その中で末木氏は、自殺についての意識がこれまでとは決定的に違ってしまったことを指摘している。その分かれ目は、「生きたけりゃ勝手に生きればいいし、死にたければ勝手に死ねばいい」という主張を前提にした、鶴見済『完全自殺マニュアル』（太田出版）あたりにあるらしいが、南条あやの自殺はそれをさらに突き抜けたところにあるという。末木氏の論を読むかぎり、その自殺の背後には彼女なりの葛藤があったようにも読み取れるから、その死の意味が私たちにまったく理解できないわけではない。だが、今日では、それ以上に不可解な自殺が、若者たちの間に増えつつある。それをどのように考えたらいいのか。彼らは、表面的には何の葛藤の痕跡も残さず、やすやすと死の淵を越えてしまったかのように見える。おそらく、彼らにとっては、生きている理由が薄弱であるように、死ぬ理由もまた薄弱

なのであろう。何の煩悶もないかのごとく、実に気軽(?)に彼らは死を選ぶ。先に「無意味」な自殺と表現したのはこの意味からなのだが、こうした自殺が増えているのは、まさしく不気味というほかはない。葛藤や煩悶はどこかにあるに違いないのだが——というのはこちらの思い込みかもしれないのだが、かりにそうしたものがあるとしても、それらは痕跡として残されることはない。むしろ最初からまったく存在しないかのように彼らは死を選ぶ。旧世代の人間には、まことに了解不能な事態というほかはない。まさか彼らが絶対的な諦観に達していたわけではあるまい。

これに関して、先の『ケータイを持ったサル』の著者である正高氏が、ベートーヴェン氏との対談の中で、実に興味深い発言をしている(「達人対談」『新潮45』2005年10月号)。正高氏によれば、死を意識することができるのは人間だけだという。動物は死そのものを意識しえないがゆえに、動作の衰えはあるにしても、死の直前まで普通の生活を送っている。そこで、そうした動物の死は、人間にとっては突然のものに見える、というのである。死だけでなく、たとえば病にともなう痛みのようなものも、人間は周囲の人為的な環境からの刷り込みによって、過度に感じるのだという。ならば、病苦、さらには死とは、すぐれて文化的な事象であるということになる。

このような捉え方が全面的に正しいかどうか、疑問もないわけではない。だが、人間以外の動物が死を意識しないのだとすれば、これまで述べてきた希薄な生を生きる若者たちのあっけない自殺は、そうした死を意識しない動物の死とどこか重なっているようにも思われてくる。「ケータイをもったサル」というのは、繰り返すように、社会性を欠いた、自己を中心とした世界しか知覚できなくなった若者の比喩だが、そうした若者たちの像は、あっけなく自殺してしまう若者たちのそれとたしかに通じ合うところがある。

近年、尊厳死や安楽死をめぐる議論があれこれ喧しいが、そうした議論が生じるのは、そもそも生が絶対的な価値として社会的に認められ、死はそうした生の対極として、生の価値を裏側から照らし出す意味をもつからだろう。しかし、確実に増えつつある「無意味」な死を選ぶ若者たちの存在は、こうした議論の根本を脅かすような衝撃力をもっているのではないか。

私の疑問は、これも繰り返しになるが、こうした若者の「無意味」な死が、果たして日本だけのことなのかどうかということである。アルベール氏の提起した問題はたしかに重要だが、その前提には、自殺を確固とした社会的な価値を背景にした行為と捉える見方があるだろう。殉教的な死、戦争におけ

る英雄的な死は、まさしくそうした価値観を背景にしている。だが、それらの死は、これまでながめてきたように、現在の日本ではほとんど意味をもたない。矛盾した言い方だが、「無意味」な死が何を意味しているのかを、あらためて問い直す必要を感じた。

(ただ・かずおみ 東京大学大学院人文社会系研究科教授)